

論文の内容の要旨

論文題目

市民メディア・デザイン

—デジタル社会の民衆芸術をめぐる実践的メディア論—

氏名 烏海 希世子

本論文は、市民メディアをデザインの観点からとらえることを提案する実践的メディア論である。市民メディアという用語が日本の中で使用され始めたのは1990年代後半のことだ。ケーブルテレビの住民制作番組、コミュニティラジオ、電子掲示板、インターネット新聞や放送局など、さまざまな形態によって営まれる市民のメディア表現活動のことを指している。発信される番組や記事には、地域づくりからメディア・リテラシーの育成、政治的な主張まで多様なメッセージが込められている。

市民メディアが広がり始めた背景には、デジタルカメラのコンパクト化や低廉化、DTP (Desktop Publishing)などのデジタル技術の向上があげられる。2000年代にはブロードバンドネットワークが一般家庭へも普及し始め、市民メディアのさらなる発展につながった。そして2000年代後半から2013年現在にかけては、SNS (Social Networking Service) やCGM (Consumer Generated Media)、ソーシャル・メディアと呼ばれる新たなネットワーク技術の躍進が、市民メディアの活動を一層多様化させている。

市民メディアに対するこれまでの主な研究は、それをパブリック・アクセスなどの新たな制度や政策の提案とともに、一般市民のメディア参加への権利を働きかける運動として着目した。アメリカを中心とした欧米各国における研究も1990年代までは同じ傾向にあり、むしろ多くの民族問題や宗教対立、反戦などの市民運動を背景として語られてきた。

しかし2000年以降、ブログやSNSなどがインターネット上に急速に広がるなか、一般市民によるメディア運動として市民メディアを位置づける視座は、その営みの一側面をとらえているにすぎないという批判が提出されるようになる。誰もが市民メディアへ参加できる技術的な環境が整ったいま、各地の歴史や文化をふまえつつ、より日常的なくらしの延長線上に市民メディアをとらえる包括的な理論や枠組みが求められてきた。

本論文はこうした流れのなかで、主にまちづくりや地域活性化のために営まれる日本の市民メディアの状況に着目しつつ、市民メディアを、人びとが自分たちの生活やそこでのコミュニケーションをより豊かにするメディアのデザイン活動として位置づける。とくに注目するのは、市民メディアにおいて立場や関心の異なる者同士が協働的にメディア表現活動を行なうプロセスである。そのプロセスのなかで、人びとの自明化された日々のくらしや考え方方が異化され、他者と出会い、自分を知り、ひいては地域社会のありようをふり返るような契機を与える媒介活動こそ、市民メディアのもっとも中心的な営みであると考えるためである。

市民メディアを地域社会の多様なコミュニケーションを生み出すメディアのデザイン活動と位置づけるために、本論文が拠り所とするのは「民衆芸術」の思想と「実践的メディア論」という領域かつ方法論である。

「民衆芸術」の思想は、主に1920年代に日本から始まり、東アジアへの広がりをもった民芸運動についての批判的検討を行なっている。民芸運動は、芸術とは美術館や劇場のなかにのみあるものではなく、日々のくらしのなかにも無名の職人や一般市民による芸術があると説いた。そうした日常的な美のありようを食器や台所用品、家具といった日用品を通して提唱した芸術社会運動である。プロフェッショナリズムという権威性を掲げた近代芸術のあり方と、歴史や伝統ある職人技術が削ぎ落された製品の大量生産や機械化といった時勢に抗った運動であった。

一方、「実践的メディア論」は1990年代に領域としてのかたちを成したメディア論のなかで、とくに2000年代以降顕著に発展してきた研究である。誰もがメディア社会の内側にくらすなかで、かつてのマス・コミュニケーション研究のようにメディアを単体の装置として外在的に観察したり、分析することは難しくなった。実践的メディア論はそうしたなかで、日々メディアを利用しながら現代社会を生きるひとりとして、研究者自身も自分とメディアとの関わりを自覚しながら、実践的にメディアをとらえることの重要性を示してきた。メディア産業や自治体、アーティストや市民グループなどと連携しつつ、新しいメディアのありようを構想し、実践してきたのである。

実践的メディア論の持つそうした未来のメディアのありように対するデザインの志向を、本論文は積極的に受け継いでいる。具体的には、本論文では実証実践編において、メディア表現活動を行なうワークショップを実施し、それを地域メディアや自治体、サークルな

どとの協働による社会連携プロジェクトへ発展させた実践研究について論じている。

本論文は序章から終章まで8つの章から成り、1章から3章までを第一部の歴史思想編、4章から6章までを第二部の実証実践編としている。また、序章と終章に加えて、1章、実証実践編はじめに、6章を、論文全体に関わる総論として位置づけている（図1）。

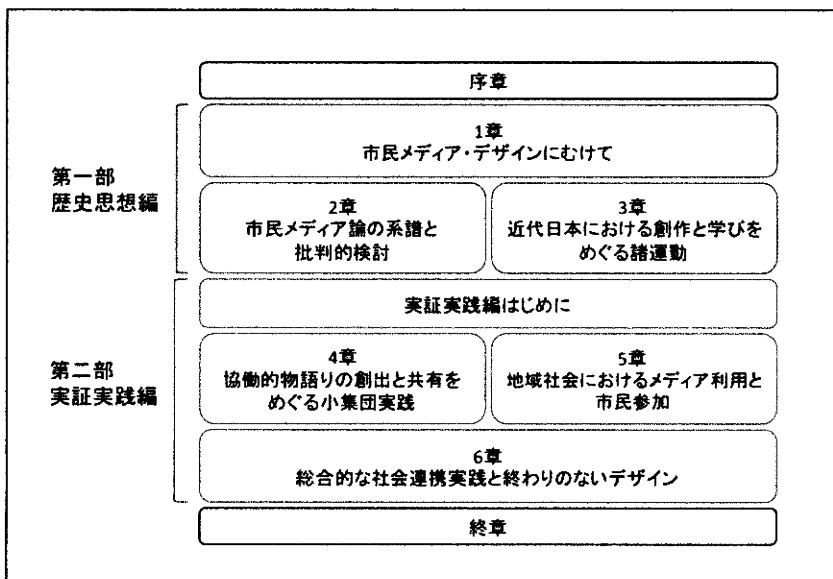


図1 本論文の構成

まず序章と1章では、市民メディアを対象とした背景と問題意識、それらに対する本論文の位置づけや枠組みについて述べる。国内外の市民メディアに関する状況や議論を紹介し、それらが近年のさらなるネットワーク技術の躍進によって変容しつつあることを述べる。また、実践的メディア論の視座を示しつつ、本論文が日常生活と芸術をめぐるデザインの視座から市民メディアにアプローチする点について論じ、論文全体を貫く「市民メディア・デザインの枠組み」を提示する。

2章では、市民メディアをめぐる先行研究の批判的検討を行なう。1950年代から1960年代の大衆文化研究のなかから「思想の科学研究会」を、1970年代半ばから1980年代にかけて進められた日本におけるマス・コミュニケーション論からニューメディア研究を、そして1990年代半ばから2000年代にかけてのパブリック・アクセス論をとりあげ、彼らと研究対象および、社会との関わりについて考察する。

3章では、現代の市民メディアに通じる民衆芸術の要素を、市民による創作や表現、学び合いをめぐる近代以降の日本の歴史文化のなかから考察する。美術運動と社会教育運動を中心とした歴史を概観したうえで、大正デモクラシーの時代と呼ばれ、農民や労働者がさまざまな運動を展開させた1920年代と、戦後民主主義に支えられ社会運動から教育活動、娯楽までの幅広い市民活動が生まれた1950年代に着目する。そして具体的な事例として、

それぞれの時代から民芸運動および、農村サークルをとりあげる。

そして、第二部では、はじめに 4 章から 6 章までの各章の関係と位置づけ、また、実践研究の背景や経緯、モチーフとなる「あいうえお画文」の概要を述べる。6 章では、筆者が企画し、実践を総括した、東京大学と文京区、そして東京ケーブルネットワークによる社会連携プロジェクトについても織り交ぜながら実践研究の総括を行なう。そのために、4 章ではそのプロジェクトの核となるワークショップの考察を、5 章ではプロジェクトのデザインのために東京都文京区で実施したアンケート、および聞き取り調査の分析を行なう。

4 章で論じる「あいうえお画文」ワークショップは、特定の地域をテーマとした協働的な物語づくりを、写真と作文によって行うものである。このワークショップは、「創作・合評・公開」活動から成る「市民メディア・デザインの枠組み」にそって、地域社会における小集団実践として企画、実施した。ワークショップを一時的かつ祝祭的な共同体の生まれる活動として分析し、それをより持続的かつ日常的な営みに広げるための課題を抽出する。

5 章の社会調査では、東京都文京区民に対し、日ごろの地域活動や市民参加、また地域メディアやソーシャル・メディアを含むメディア利用についてのアンケート調査、および聞き取り調査の分析を行なう。アンケート調査の設計は、南カルフォルニア大学においてロサンゼルスのエスニック・コミュニティを対象に行われている実証研究プロジェクト「メタモルフォーシス」の枠組みを援用して行っている。

6 章では、まず、社会連携実践プロジェクトに発展した「あいうえお画文—写真で投稿！まちの思い出つむぎプロジェクト」の概要を論じる。このプロジェクトは、東京都文京区を拠点に、2011 年 5 月から 7 月にかけて約 3 ヶ月にわたって実施されたものである。文理融合型の学際研究プロジェクト「メディア・エクスプリモ」(JST、CREST) の実践であり、また、東京大学と文京区による連携事業の一環でもあった。さらに、文京区、千代田区、荒川区に放送エリアを持つ東京ケーブルネットワーク (TCN)、サークルや商店街からの協力も得て、筆者がプロジェクト全体の総指揮を担った実践である。連続的におこなわれたワークショップを中心に、TCN のコミュニティ・チャンネル番組、ウェブサイトやチラシなど、複数のメディアを連携させた。

6 章では、この社会連携プロジェクトの結果、そして 5 章の調査や 4 章のワークショップの分析もふまえつつ、実証実践編の総括を行なう。すなわち、本論文の目的である未来のデジタル社会における市民メディアをとらえるデザインの観点、その思想と実践の枠組みの有効性について、各章の成果を敷衍しつつ、その可能性と限界について考察する。そして終章では、本論文の成果をふり返りつつ、課題と展望についてまとめる。

本論文は、歴史思想編から実証実践編にかけて、未来の市民メディアのありようをデザインし、実践、考察するものである。そのなかで具体的かつ包括的なデザインの思想と実践を示すことによって、市民メディア論に新たな視座を提案することを目指している。